

建礼門院徳子⑤

一龍斎貞花

講談師

静御前が、義経を偲んで鶴ヶ岡八幡宮での舞いからわずか半月ほどのちの、文治2年4月20日過ぎ、都を離れた物寂しい山里へ、わずかな供を従えし御白河法皇がお忍びの大原御幸、一丈四方の庵室寂光院を訪れました。

門はかたむき、瓦は落ち、庭には青草が生い茂り、聞こえるは遠くに鳴く猿の声と、樵が木を切る斧の音。

山里の見るも寂しき粗末な庵。

ほとほと門を叩けば

「誰方様にございますか、ま、これは法皇様」「そなた阿波内侍か？」

法皇は、平治の乱で源義朝に殺された小納言藤原信西の娘阿波内侍をよく知っていたが、見るかげもない余りにみすぼらしき姿に思わず問うたのでございます。

「只今、お花を摘みにお出掛けでございます、すぐにお呼び致して参ります、お待ち下さりませ」

ほどなく花を手に建礼門院徳子が戻ってきた。法皇にとって息子高倉の嫁である徳子。許されて都へ戻った徳子は、髪を下ろして尼となり、法名を真如覚といい、大原寂光院に寂しい日々を送っていたのでございます。

「このようなところへ、ようこそお越し下されました。み仏のお迎えをうけて死ぬことのみ念じておりましたのに、思いがけない御幸ありがとうございます」

「いかがしておいでかと、そなたを一目見たくてやって参った。なにかにつけさぞいろいろなことが思い出されて、つらいことであろうがな・・・」

「ハイ、今は安徳天皇や平家一門の冥福を祈っております。昔は交流のなかった冷泉大納言や、七條修理太夫の北の方がお訪ね下され、心から嬉しく思いましたが、目をかけていた役人は参りません、人の心の暖かさ冷たさに、自分の思いとの違いを感じています」

「浮き世の習いと申そうかのう」

「昔、管弦の明け暮れをしたのは正に天女の振る舞いでありました。その後、一の谷の戦いでは、食べ物もない船の中で餓鬼を体験し、壇の浦では、海に浮きつ沈みつする人々の叫び声は阿鼻叫喚の地獄でございました。捕らわれて落ちたのは返すがえすも無念のこと。今や命は惜

しくなく、過ぎしことは嘆きませぬ。

ただ、ただ一念十念の念仏をして、安徳天皇のところへ早く参りとうございます」二人の間に、さまざまな話が静かに交わされたのでございます。

寂光院の夕暮れ

思い起こせば壇の浦で義経に敗北し、母である二位の尼時子は、三種の神器草薙の剣を腰に帯び、幼き安徳天皇を抱き参らせ船端に立った。

「尼よ、いずこへ行くのじゃ」

「波の下にこそ極楽浄土、目出度き都がございます」「ならば行こう」

母は娘徳子に、「女子は殺されないから、そなたは生きなされ」と、言葉を残し海中へ身を躍らせた。

夫高倉に先立たれ、今また我が子にも一人生き残っても致し方なしと、徳子も母と子の後を追って海へ飛びこんだ。

重しとしての剣を帯びていた母と子は海に沈んだが、徳子は着せし十二単衣のため沈むことなく水面に浮き上がり、源氏の兵士の熊手にて船に引き上げられたのでございます。

その後は、地獄の有様でした

平家物語の中で徳子が語っておりますこの言葉が、後に義経が建礼門院を手始めにしたなどと、逸話が生まれたのでありましょう。

捕らわれた平家の女性は、みな釈放さ

れたものの、敗残の身の上とあって京都の町に住むわけにいかず、身分ある女性の多くは尼になり、その他の者たちも郊外の村里にひっそりと隠れ住む者がほとんどでした。

時のたつのを忘れて語り合う法皇と徳子。すべて帰ることのない繰り言でしかありませんでした。

話せど尽きぬ二人の語り。やがて寂光院の夕暮れの鐘の音が……。

「名残は尽きぬが、早や戻らねばならん、身体をいといなされよ」

「このようなところへ、よくぞお訪ね下されました、法皇様もお身体おとい下さりませ」

法皇の車が見えなくなるまで見送った徳子は、庵室に戻るや筆をとり

“このごろは いつならひてかわが心
大宮人のこひしかるらん”

“いにしえも夢になりにしことならば
柴のあみ戸も ひさしからじな”

髪を下ろし尼となって念仏三昧の日々を過ごせし徳子も、法皇にお会いしてかつての栄華の日々が思い出され、都の人々が恋しくなったとの気持ちを歌に詠んだのでございます。

ただ一人生き残りし建礼門院は、改めてこの世の無常をさとったのでございます。徳子は、59歳でこの世を去るまでの約30年の間、寂光院にて我が子安徳天皇はじめ、海に沈みし一門の人々の菩提を弔ったのでございました。